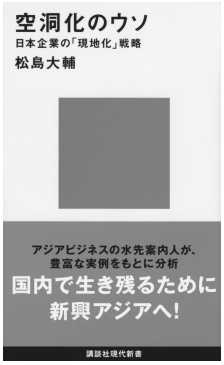
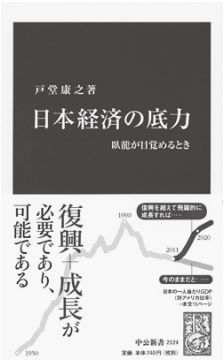


空洞化のウソ
－日本企業の「現地化」戦略－
松島大輔 著／講談社現代新書

「企業の海外進出」と聞くと、工場の海外移転に伴う国内雇用の縮小や国内設備投資の減少といった経済のシュリンク（縮小）を想起しがちだ。しかし、近年、企業の海外進出は必ずしも国内産業の空洞化につながらないと言われ始めている。この論点について、著者は各種研究結果を用いて明らかにしている。本書を読めば、海外子会社の稼ぎが日本国内に還流していること、海外進出をした企業が、日本国内で雇用を増大させていることが確認できる。また、本書では日本企業の「新興アジア」への現地化のもたらす意義とその手法についての示唆もなされている。

今後、我が国では企業の海外進出という潮流を避けては通れない。これを積極的に捉え政策課題を考える際、本書の示唆が参考になるだろう。（く）



日本経済の底力
－臥龍が目覚めるとき－
戸堂康之 著／中公新書

「東日本大震災後の日本を立て直すにはどうしたらよいのか」という多くの書物で議論されている問題に対し、本書は、日本各地に存在する、高度な技術や高い競争力を持つ人材や企業－臥龍－を産業集積によってつなげ、経済をグローバル化させることを解決方法の一つとして提案する。一般論として理解されがちなこれらの論点について、経済学を中心にデータを利用した実証分析をもとに議論を展開している点が、本書の特徴と言える。さらに、グローバル化の手法として、産業集積の考え方やTPPの本質、特区の活用などについて分かりやすく解説しており、震災前の日本経済の状況から、近年話題となっている経済政策について一通り理解するためにもよい一冊である。（し）

未来をつくる資本主義
－世界の難問をビジネスは解決できるか－
スチュアート・L・ハート 著、石原薫 訳／英治出版

著者が98年に「ピラミッドの底辺に眠る富」という論文を発表して以来、40億人ともいわれる貧困層をターゲットに事業を展開するＢＯＰビジネスの可能性に世界中から注目が集まっている。一方、現在のＢＯＰ戦略は、貧困層を顧客として捉えるだけに留まっており、貧困の解決や持続可能な開発といった根本的な問題に対処していないという批判も根強い。

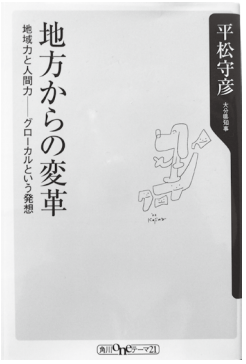
本書は実例を交えながらこれらの批判に答え、現行の開発支援体制の在り方にも一考を促すものである。世界中の大企業が取り組み始めてはいるものの、著者が力説する「土着化」までは進んでいない。著者の理念を実証する事例が多く生まれ、真の貧困問題解決への挑戦が続いていくことを期待する。（み）

自治体を民間が運営する都市
－米国サンディ・スプリングスの衝撃－
オリバー・W・ポーター 著、東洋大学ＰＰＰ研究センター 訳、
根本祐二、サム田渕 監修／時事通信出版局

本書は、日本の地方自治体における民間活力の活用方法についてヒントを与えてくれる一冊である。著者は、「サンディ・スプリングス市」の成功例を紹介しながら、様々な問題点や疑問点を解明している。

サンディ・スプリングス市では、行政の管理の下に、警察と消防を除いたほぼ全ての業務が民間企業に委託されている。そして、民営化によって民間企業の新しい価値を創造する工夫を最大限に活用することで、少ないコストでより良い行政サービスの提供を実現している。

近年、財政的に厳しい状況にある地方自治体も少なくない。その解決策の参考モデルとして、自治体職員に一読を勧めたい。（ひ）



地方からの変革
－地域力と人間力―グローカルという発想－
平松守彦 著／角川書店

ローカルであればあるほどグローバルにも評価されるという。

本書は、一村一品運動など創意ある施策で地域振興を図ってきた著者自身の経験から、「ローカルにしてグローバル」な地域力の育て方を考える一冊である。国境を越えた地域住民同士の交流が、地域文化の創造や地域のアイデンティティの確立に役立つことをローカル外交など豊富な事例をもとに伝えている。

地域住民同士の交流から新たな視点が生まれ、住民自身が地域の資源を再認識する。住民が地域文化の価値の創造や再発見を重ねていくことで地域が活性化していく。魅力あるローカル文化はグローバルにも通用する。本書で紹介されているグローカルという発想は、実効性ある地域づくりへの手がかりである。（ゆ）

グローカル時代の地域づくり
（第二版）
恩田守雄 著／学文社

本書は、地域差が均一化していくグローバリゼーションという現在の大きな流れの中でローカリゼーションという地域固有のあり方を模索し、両者を統合した「グローカリゼーション」という観点から地域づくりを提示している。

その中で著者の民間企業の経験から、本来の地域づくりは地域固有の資源を活かした「住民の、住民による、住民のための村づくり、まちづくり」と捉え、様々な方策を具体的な事例を交えて紹介している。また、ハード面だけでなくソフト面・ヒューマン面も地域づくりに重要な点だとしている。

まちづくりの実務に携わる自治体職員や市民活動家にとって、実践のヒントが得られる書である。（こ）

国境をこえた地域づくり
－グローカルな絆が生まれた瞬間（とき）－
西川芳昭・木全洋一郎・辰己佳寿子 編／新評論

「なぜ、地域づくりのために国際協力なのか？」という疑問に答えるための視点でまとめられており、平成の大合併を行わず自律を目指そうとした複数の町を取り上げて、国際協力という活動がいかに地域づくりにつながっていくのかを具体的に紹介している。

本書では、情報交換の相手が先進国か途上国かは問題ではなく、双方向の情報の流れの中で「気付き」や「刺激」が与えられることにより地域づくりが進み、人材も育成されるという成果につながっていくと述べている。

自治体職員の記述からも、「国際協力」が身近な活動に感じられ、その「国際協力」に対する新たな捉え方に気付かされた。グローバル化時代の新たな価値観の創造につながる一冊である。（は）

公務員のための外国語活用術
－窓口対応！指差し会話一覧表つき－
毛受敏浩 著／ぎょうせい

グローバル化により、自治体職員も様々な場面で外国語の活用を求められるようになっている。

本書では、外国籍住民からの納税相談といった具体的な事例を挙げながら自治体職員にも外国語スキルが必要な時代が来たことを説くとともに、「公務員としての」英語勉強法を示している。

また、英語でのプレゼン、海外からの訪問団受入れといった個別のケースについて、心構えや準備の仕方などに関するアドバイスも書かれており、より実践的な内容となっている。

外国語を活用する事務に携わっている職員はもちろん、そうでない職員にとっても一読の価値がある。（さ）

なぜ、国際教養大学で
人材は育つのか
中嶋嶺雄 著／祥伝社黄金文庫

グローバル人材の育成で企業から注目を集めている秋田県の公立大学「国際教養大学」の学長が同大学の取組等を記した一冊。

本書において著者は、グローバル人材の育成にはコミュニケーションツールとしての英語力及び教養教育が重要だとしている。その上で、日本の若者が内向きになっている原因を教養教育の不足にあるとし、大学が専門教育を偏重した結果、知的好奇心が育まれず、若者が海外に目を向けなくなっていると論じている。

グローバル人材というと英語力にばかり目が向きがちであるが、英語力とともに、若者が臆することなく海外に目を向けるための土台を作る教育が大切だと感じる一冊である。（し）